

広報

まぐす

2022

6

No.209



(特集) 地域おこし協力隊の素顔

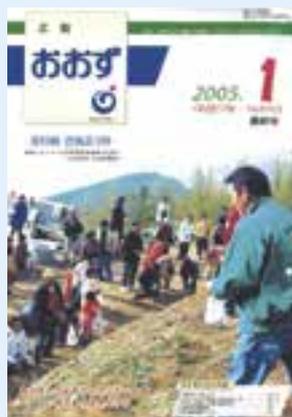
旧市町村広報誌の デジタルアーカイブ化が完了しました

この度、合併前の旧4市町村（旧大洲市、旧長浜町、旧肱川町、旧河辺村）の広報デジタルアーカイブ化事業が完了しました。

古いものは昭和29年から可能な限りデジタル化を行い、大洲市ホームページ上に公開しています。（一部欠号があります）

昭和、平成、そして令和と、広報を開けば市政のあゆみをご覧いただけるとともに、みなさんの懐かしい姿を見つけることができるかもしれません。

※デジタルアーカイブ：大切な書類などの情報を電子データ化して保存すること



広報誌を探しています

今回のアーカイブ化事業では見つけることができず欠号となっているものや、アーカイブされているものより保存状態が良い広報をお持ちでしたら、ぜひ企画情報課 広報広聴係までご連絡ください。

企画情報課 広報広聴係

☎0893(24)1728

市ホームページ



(特集) 地域おこし協力隊の素顔



「地域おこし協力隊」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。大洲市ではいま、3人の若者が自身の持つ知識や技術を活かして活動しています。今回は、この地域おこし協力隊の隊員それぞれが、どのような思いを持って活動をしているのかを紹介します。

地域おこし協力隊とは

地方の自治体が都市からの人材を受け入れ、その地域で移住・交流活動の支援や特産品の開発などの地域活動に従事してもらいながら、定住・定着を図る制度です。任期は1～3年間で、地域としては外からの視点で地域に刺激を与えられ活性化がもたらされること、隊員自身は自分の培ってきた能力を活かす場が提供されることが期待されます。平成21年度の制度開始から10年以上が経過した現在、6,000人を超える隊員が全国で活動しています。



「協力隊として応募する候補地はたくさんあった。他の地域は『これを作ってくれ』『これだけをしてくれ』と活動が限定されているところが多かったが、大洲市は見学時に、自分に合ったプランで臨機応変に対応してくれた。歴史的な町並みや文化、豊かで変化に富んだ地形、そして温かい人たちに触れ、そこに自分が活かせる可能性を感じて、ここで頑張ろうと決めた」と話す中村隊員。

好奇心旺盛という彼は数多くの資格をもち、大洲市に来てからも狩猟免許を取得しました。

「今は鵜飼^{うい}い舟の船頭にも興味があり、研修中」と持ち前の明るい笑顔で話します。

そして、農業の副収入になるような盆栽や、庭師の仕事にも取り組みつつ、就農を目指して活動しています。

大洲に新しい風を吹かせて人を笑顔にしたい 中村^{こういち}光一隊員（農林水産課所属）



イチジク栽培を学ぶ



農家研修



鵜飼い舟の船頭に挑戦



盆栽にも取り組む

現在は資源としての「竹」に注目し、活用方法を研究しています。「大洲市は県内でも竹林の多い地域。例えば新たに農業を始めようとする人にとってはビニールハウスなどの初期投資が大きな壁となる。それを骨組みに竹を使うことで費用を減らし、参入しやすくできないかを考えている」と、今年1月には実際に竹ハウスを作成しました。

「次は竹でキウイフルーツ栽培用の棚を計画している。鉄の価格が高騰しているので、この活用方法が農家の助けになれば」と日夜新しいアイデアに取り組んでいます。



竹ハウスづくり



大洲に来た理由「自然があるからです」
岡本^{まり}麻里隊員（肱川支所所属）

令和3年10月に着任した岡本隊員は、愛知県出身の女性隊員。

一見おとなしそうな彼女ですが、周りを田畑で囲まれた地域で育ち、自らの幼少時代を「野生児だった」と振り返ります。

大学の農学部を卒業後、一般企業で働きながら、大好きな自然を相手にしながら、人の役に立つ仕事を模索していたところ、協力隊の募集を目にしました。現地視察では「大洲市には仕事に^{しんし}真摯に打ち込むかっこいい人がたくさんいた。そして大好きな自然があった」と着任を決意。

そんな彼女は今まで学んだ知識を基に、野草を食材として活用できないかと考え、さまざまな種類の野草を収集するため、肱川地区を中心に野山を駆けまわる日々を送りながら、現在は市内のレストランと協力し、季節ごとの一品となるようなレシピを考案中です。



野山が彼女の職場

カラムシ、ウバユリ、キュウリグサなど、野草の採取に同行すると耳慣れない名前が次々出てきます。

名前だけでなく摂取できる栄養素など、野草について語りだすと止まらなくなる岡本隊員。就任当初は一人で見知らぬ土地に移住したため、何をやっていこうか迷った時期もあったそうですが、「大学時代にインターシップとしてフィリピンで1年間働いたが楽しかった。自分自身で楽しくすればいいと思っているので」と言い切る強さがありました。

新たな大洲の味として、岡本隊員が開発した野草料理を、みなさんが口にする日もそう遠くないかもしれません。



道端も調査対象



採取した萱草(カンゾウ)はバター炒めに



時間がある日は道の駅「清流の里ひじかわ」へ



中居谷からの眺めがお気に入り



肱川の魅力をもっともっと引き出したい

杉井^{たいち}太一隊員（都市整備課所属）

4月に着任したばかりの杉井隊員。実は大洲市出身で、故郷に戻ってきたUターン隊員です。

中学時代から肱川でカヌーを始め、高校時代はえひめ国体に出場し、男子カヤックフォア（200m）の部で5位に入賞した実力者。

大学時代も帰郷中はカヤックの指導などを通して川に触れていましたが、このような経験を地域と行政が一体となって進めている「肱川かわまちづくり」に活かしたいと語ります。

「せっかく『肱川』という素晴らしい川がありながら、そこで楽しんでいる人はまだまだ少ないと思う。カヌーやサップなどをもっと気楽に楽しめるように敷居を下げていきたい。現在は『フリースタイルカヤック』という新しいカヤックの競技にも挑戦中で、その魅力もこの肱川から情報発信していきたい。」と意気込みます。



肱川の魅力を語る杉井隊員



えひめ国体リハーサル大会出場時



リハーサル大会優勝の瞬間



ホームグラウンドは肱川

芸術大学で写真を学び、こちらもコンテストで賞を取るほどの腕前です。これからは大洲市のSNSなど情報発信の場で彼が撮影した写真を目にするのが多くなりそうです。



大学生時代



卒業制作品「ZAIMOKUZA」



隊員としての夢を語り合う3人

今回、地域おこし協力隊を取材するにあたって、3人に集ってもらい、それぞれの話を聞きました。

中村隊員から竹の話が出れば、杉井隊員から「竹の造形物をアートとして肱川に浮かべることができないか」などの新しいアイデアや、岡本隊員からは「文章を書くことが好きなので、この野草採集の経験を何か形にできないか考えている」など、今後の構想があふれ出てきます。短時間の取材でしたが、隊員のみなさんがそれぞれの思いを語るうちに、個々ではなく連携した活動の話も出てきて盛り上がりました。

プライベートでも、宿泊施設に盆栽を展示したり、キャッスルステイでの城主入場の太鼓を叩いたり、積極的に地域活動に参加し、大洲市の活性化のために頑張ってくれている隊員たち。

隊員には最長で3年の任期があり、そのあいだに定住するための手段を確立することも必要な課題です。

「隊員と一緒にこんなことをやってみたい」

「協力隊の活動に興味があった」など協力隊をバックアップしてくれる企画や情報をどんどん提供して欲しいという3人。今後、活躍の場を広げることができれば、いろいろな場でのみなさんにお会いするかもしれません。その時は、ぜひ気軽に声を掛けてみてください。

地域おこし協力隊の活動は、下記のSNSでもご覧いただけます。

Instagram



Facebook



盆栽士の資格を持つ中村隊員の作品



キャッスルステイでの岡本隊員



杉井隊員のフリースタイルカヤック